

運動部活動経験が大学生のスポーツ生活に与える影響

浪越 一喜¹ 藤井 和彦² 谷藤 千香³ 井崎 美代⁴

¹ 帝京大学 ² 青山学院大学非常勤講師 ³ 千葉大学教育学部 ⁴ 九州ルーテル学院大学

The influence of the sport clubs in high school on the sport-life for university students

Itsuki NAMIKOSHI Kazuhiko FUJII Chika TANIFUJI Miyo IZAKI

¹Teikyo University ²Aoyama Gakuin University ³Chiba University ⁴Kyushu Lutheran College

Sports clubs in school can be an important factor contributing to students' involvement in sporting activities throughout their lives. The purpose of this study is to discuss the role of sports clubs and sporting activities in high school on university students' choices and level of involvement in sports during their university life.

Such a study suggests an improvement in the management of sports clubs in high school.

We sent out questionnaires to university students to ask about their sporting activities in high school and we received 604 answers.

The results of the survey are as follows:

1. The students who belonged to sports clubs in high school tend to continue to play sports in university. They expressed an intention to participate in sporting activities in the future and throughout their lives.
2. Students' choices and level of involvement in sporting activities in the university were directly influenced by students' level of satisfaction in sports clubs in high school. Satisfactory participation in sports clubs enhances relationship development among team mates as well as improvement, performance, and achievement within individual sports.

Consequently, good experiences in high school sports clubs encourage university students to be eager to play sports, develop positive attitudes and sportsman-like conduct not only in high school but in university and thereafter.

キーワード：運動部活動 (Sports Clubs in school) スポーツ生活 (Sport-life)

1. 緒言

中央教育審議会は、「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について—子供に「生きる力」と「ゆとり」を—(1996.7)」として第一次の答申を行った。その答申では、学校のスリム化が唱われているが、運動部活動の課題や方向性も取り上げられている。運動部活動を改めて教育活動の一環と捉え、学級や学年を越えて自発的・自主的に展開され、体と心の発達や仲間づくり、教員との触れ合いの場としての意義を有しているものであるとし、学校教育が担うものであることが確認されている。しかしながら、運動部活動への強制的参加や勝利至上主義的な考え方による活動日数及び時間を強制するような一部の在り方については改善を図る必要性を指摘し、また地域社会における条件整備に加えて、指導に関する地域の協力を得るなど地域の教育力の活用を図り、学校に指導者がいない場合など、地域社会に委ねることも必要であると、学校と地域との連携の必要性を付記している。

また、当然のことながら教育課程審議会答申(1998.7)をはじめ、保健体育審議会答申「生涯にわたる心身の健康の保持増進のための今後の健康に関する教育及びスポーツの振興の在り方について(1997.9)」においても関連して触れられているが、高レベルの技能習得や記録への挑戦によって得られるスポーツの楽しさや喜びを味

わい、豊かな学校生活を経験する活動であるとしている。つまり運動部活動は、生涯にわたってスポーツに親しむ能力や態度を育てる重要な教育機会と位置づけられている。これらの指摘は以前から宇土が「課外クラブ(部活動)の最も基本的な意義は、教科以外の自由な時間に、自ら選んだ運動の集団に主体的に参加し、より深く運動を追求することにある。ここでは運動の楽しさや喜びを知ること、技能を高めることのほか、個性の伸長と学級や学年を超えた集団の中での、個性をもとにした社会的経験が含まれている。特に、主体的に参加した集団の中で共通目標に向かって努力するという経験は他の学校生活では得ることのできないものである。学校教育としての課外クラブの最も重要な意義はここにあるといえよう。」と述べていることの再確認に過ぎない。

近年なぜこのような指摘が再び強調されているのだろうか。この背景に現状の運動部活動のさまざまな問題点が存在している。特に、少子化による生徒数の減少、運動以外の活動への興味・関心などによる運動部活動への参加生徒数の減少等、競技種目によってはチームが編成できない状況が表面化し、単独校での運動部活動を継続することが困難な状況が存在し、スポーツを行いたいという生徒の関心や意欲に応えるため、複数校合同の運動部活動の円滑な運営並びに全国大会への参加の道を拓けていく等環境の整備が求められている。また、指導者の高

齢化や実技指導力不足のために、十分な指導ができず、活動が充実したものにならない等の状況がある。その一方でこれまでも指摘されていたことでもあるが勝利至上主義的な考え方に基づく一部の行き過ぎた活動や指導が生徒の今後のスポーツ生活に負の効果を与える可能性も否めない等の問題もある。「運動部活動の在り方に関する調査研究(1997)」においても類似する視点で調査がなされ、その問題点は、生徒の疲労32.8%、時間的余裕32.1%、休日の問題32.1%、技能習得の問題18.8%となっており、活動の量的な在り方が指摘されている。しかしながら、問題となる活動時間や活動日数、対外試合数、指導者の不足している運動部数など量的な項目に関わる調査並びに検討(神奈川県、大阪府、船橋市等)は多々行われてきているが、これまで重要であるとされてきた質的な側面での調査及び検討がなされている例は少ないように思われる。

本研究の目的は、宇土が「クラブとして行われる運動(運動部活動)は、それが正常に行われるならば、運動の継続性、組織性および合理性などの観点から大きな体育的效果が期待でき、その経験は、卒業後の運動生活の基盤形成に強くはたらくことが考えられるため、体育事業としては特に重視される。運動クラブとは、①運動のための共通目的をもち、個人の自発的意思により結合した『(運動)仲間』を基礎とした集団であり、集団としての目標をもつ。したがって、構成員個々は、集団の目標に規制を受けることになる。②構成員の総体によって、主体的・組織的に運営される集団である。③集団の構成員の範囲が明確にされており、メンバーシップが存在する。」とする視点に立脚し、高等学校時代における運動部所属の有無及び運動部活動経験が大学生の運動生活及びスポーツ生活にどのように影響を与えているのかを明らかにし、大学生の生涯にわたって運動及びスポーツに親しむ態度を育む上で重要と思われる高等学校の運動部活動改善への一助となる提言をすることである。

II. 方 法

1. 調査項目の設定

先述したような高等学校の運動部を取り巻く諸問題の解決が大学生の運動生活をさらに豊かにしていくものと期待されるが、運動部活動の中でどの要素が運動及びスポーツ参加に関与しているのかという明確な回答が得られないままの解決策の提示はその意味が薄れる可能性がある。本研究では、高等学校の運動部経験が良好(満足)であった場合、大学において本来自主的活動である運動部活動及び学内のサークル活動に参加し、その活動のし方は自立しているのではないかと仮定した。また、運動部経験が不良(不満足)であった場合には大学においても未加入者となり運動及びスポーツから距離をおくのではないかと、活動に参加している場合においても前者に比べて他者に依存しながら活動しているのではないかと仮定した。

調査項目は、個人属性、高等学校・中学校の運動部活動参加の有無、高等学校運動部活動の様子及び総合的な満足、現在の運動及びスポーツ活動、今後のスポーツへ

の継続・参加意思等で構成した。特に高等学校運動部の活動の様子については、部活動の共通目標に関する項目、活動内容の運営に関する項目、部員間の関係に関する項目、メンバーシップに関する項目、スポーツの本質に関する項目、運動部活動を取り巻く環境に関する項目等の28項目を設定し、調査票を作成した。また、高等学校運動部活動の様子及び総合的な満足、今後の継続参加意志の測定スケールは「かなり思う」(5点)から「全く思わない」(1点)のリッカート型間隔尺度を採用した。

2. 調査の方法

関東近県の4大学(千葉大学、帝京大学、青山学院大学、東京工芸大学)において調査を実施した。調査対象者は、基本的に高等学校当時の運動及びスポーツ活動に関する記憶の新しい1年次生に履修配当年のある授業を選択して行った(一部履修配当年を超越しているものも含まれている)。有効回答サンプル数は604であった。また、調査期間は2002年7月上旬から中旬にかけて実施した。

III. 結果及び考察

1. 調査対象者の属性

表1は性別による調査対象者のサンプル特性を示したものである。高等学校運動部所属者は男性で69.3%、女性で43.5%であり、全体で56.2%となっている。この数値は、運動部活動の在り方に関する調査研究報告書の運動部活動経験者に比べていずれも高くなっている。また、中学校の運動部活動経験では、男性は、87.3%と高くなっているものの女性においては、60.8%と若干低い値となっている。高等学校運動部の総合満足は、「かなり満足している」が56.4%を占め、平均得点も全体で4.19と高い値を示しているといえる。一方、現在の運動及びスポーツの状況は、56.5%の学生が何らかの活動に関与しており、そのうち、学内での活動に関連している学生は69.9%、実際の運動及びスポーツ活動に主体的に関与しているものが67.3%を占めている。現在の運動及びスポーツ活動の満足度平均得点は3.42と余り満足していないものも存在しているが、今後の運動及びスポーツ活動の参加・継続可能性に関する意志の平均得点は4.19と高い値を示している。このような調査対象者の特性は、本研究を遂行する上で、現実的な高等学校運動部活動の描写と大学生の運動及びスポーツ活動に対する考え方から逸脱するものではないことが推察されよう。

2. 運動部所属と運動・スポーツ生活

表2は、高等学校運動部所属の有無によって現在の運動及びスポーツ活動の状況を示している。運動部所属経験者339名(56.4%)、非所属者262名(43.6%)の現在の運動及びスポーツ状況は、何らかの運動及びスポーツをしているものが運動部所属経験者で72.0%を占めており、非所属者は36.2%に止まっている。サンプル全体で高等学校運動部の所属の有無と現在の運動実施状況の有無を比較(表3)するとその差はより明らかになる。運動部所属経験者は全体の40.7%が現在も何らかの運動を

表1 性別による調査対象者の属性

単位：％

		男性 (N=290)	女性 (N=302)	全体合計 (N=592)	χ^2 検定	
高校運動部の所属	所属	69.3	43.5	56.2	p<.001	N.A.=3
	非所属	30.7	56.5	43.8		
高校運動部の満足度 (所属者のみ回答)	5. かなり満足している	53.6	60.8	56.4	n.s.	N.A.=273
	4 ↑	19.6	18.4	19.1		
	3	11.9	14.4	12.9		
	2 ↓	13.4	5.6	10.3		
	1. 全く満足していない	1.5	0.8	1.3		
	平均得点 (5点満点)	4.10	4.33	4.19		
中学校運動部の所属	所属	87.3	60.2	73.3	p<.001	N.A.=23
	非所属	12.7	39.8	26.7		
現在の運動状況	定期的・試合参加型	30.4	13.8	21.9	p<.001	N.A.=11
	定期的・試合不参加型	16.3	10.4	13.3		
	不定期・試合参加型	5.3	2.7	4.0		
	不定期・試合不参加型	17.7	17.1	17.4		
	ほとんど活動なし	30.4	56.0	43.5		
現在の代表的種目	陸上競技系	4.5	5.2	4.7	p<.01	N.A.=297
	水泳系	3.4	7.8	5.1		
	武道	7.3	9.5	8.1		
	バスケット・バレーボール	27.9	19.8	24.7		
	野球	8.9	1.7	6.1		
	サッカー	19.6	0.9	12.2		
	ラケット型スポーツ	14.0	29.3	20.0		
	その他球技	6.1	2.6	4.7		
	その他	8.4	23.3	14.2		
現在の所属	学内の部	30.7	31.7	31.1	n.s.	N.A.=280
	学内のサークル	36.5	42.3	38.8		
	学外有志サークル	2.6	0.8	1.9		
	地域のクラブ	12.2	3.3	8.7		
	民間フィットネスクラブ	2.1	4.1	2.9		
	個人的な活動	15.9	17.9	16.7		
活動の主体性	主体的に活動	68.6	64.9	67.3	n.s.	N.A.=320
	従属的に活動	31.4	35.1	32.7		
役割や規則	あり	31.0	30.0	30.7	n.s.	N.A.=318
	なし	69.0	70.0	69.3		
現在の活動への満足	5. かなり満足している	22.7	21.1	22.0	n.s.	N.A.=265
	4. やや満足している	29.9	25.6	28.1		
	3. 満足	21.1	23.3	22.0		
	2. あまり満足していない	23.7	27.1	25.1		
	1. 全く満足していない	2.6	3.0	2.8		
	平均得点 (5点満点)	3.46	3.35	3.42		
今後のスポーツ活動 開始・継続の意志	5. かなり思う	59.1	46.3	52.5	p<.05	N.A.=15
	4. やや思う	17.1	20.3	18.7		
	3. 思う	19.9	28.0	24.1		
	2. あまり思わない	3.2	5.1	4.2		
	1. 全く思わない	0.7	0.3	0.5		
	平均得点 (5点満点)	4.31	4.07	4.19		

注) 質問項目により回答数は異なる。

しており、運動部の所属経験のないものでは、15.8%と低くなっている。さらに、その活動は、運動部所属経験者では、試合参加の有無にかかわらず、定期的活動をするものが48.0%存在している。また、現在の活動の場は、運動部の所属経験に関わらず学内の部活動やサークル活動に参加しているものが多く、所属経験の有無によるその差は見られなかったが、地域のクラブに所属して活動している点ではその割合に違いがあるといえよう。

現在の運動及びスポーツへの満足と今後の運動及びス

スポーツ活動への継続意志を運動部所属経験別に示したものが表3である。表2から、現在の運動及びスポーツ活動には差が見られなかったが、所属経験のあるものが所属経験のないものと比べてその活動の満足度は高いという有意な差が認められた。また、今後も運動及びスポーツを継続する意志がどの程度かについても所属経験のあるものが所属経験のないものと比べてその活動の継続意志は高いという有意な差が認められた。

3. 運動部活動の様子とその満足度

表2 高等学校運動部所属の有無と現在の運動及びスポーツ活動の状況

単位：％

		所属 (N=339)	非所属 (N=262)	全体合計 (N=601)	χ^2 検定	
現在の運動状況	定期的・試合参加	33.0	8.2	22.2	p<.001	N.A.=11
	定期的・試合不参加	15.0	10.9	13.2		
	不定期・試合参加	4.8	2.7	3.9		
	不定期・試合不参加	19.2	14.4	17.1		
	ほとんど活動なし	27.9	63.8	43.6		
現在の所属	学内の部	33.5	24.7	30.9	n.s.	N.A.=284
	学内のサークル	39.3	40.9	39.7		
	学外有志サークル	2.2	1.1	1.9		
	地域のクラブ	9.8	5.4	8.5		
	民間フィットネスクラブ	2.2	4.3	2.8		
	個人的な活動	12.9	23.7	16.1		

注) 質問項目により回答数は異なる。欠損値はN.A.で示している。

表3 高等学校運動部の所属の有無と現在の運動実施状況
単位：％

	運動部所属	運動部非所属	合計
現在運動をしている	40.7	15.8	56.4
現在運動をしていない	15.8	27.8	43.6
合計	56.4	43.6	100.0

注) %は各セル全体に対する構成比

N=590 N.A.=14

 $\chi^2=75.98$ p<.001

先に運動部所属経験がその後の運動及びスポーツ参加に影響を及ぼすであろうことが確認されたが、高等学校時代の運動部活動の満足の高低によって、今後の運動及びスポーツ生活に何らかの影響を与えることも考えられ、運動部活動の様子について28項目によって測定を試みた。分析には、高等学校運動部についての満足度の平均点4.22を基準として、満足高位群と満足低位群に分類し、それぞれの平均点での比較を行った(表5)。その結果、21の項目において有意な差が確認された。高満足群では、活動目標の明確さと理解、練習内容の理解と充実、指導者に有意な差が認められ、各個人の問題では、積極的に取り組み、自らの役割が明確であったものが高い値を示し、部活動の雰囲気や仲間そして達成感や喜びを味わった経験が豊富かどうかによって差が生じている。このことから、運動部活動における満足は、自分が活動に参加しているという意識や充実感が深く関与しているものと推察される。

4. 運動部活動の様子と今後の継続意志

運動部活動の総合的な満足度の違いによって、高等学校運動部の運営改善への方向性が示唆されたが、運動部所属経験が今後の運動及びスポーツ活動にどのような影響を及ぼすかについては明確になっているとはいえない。表6は、運動部所属経験者について、運動部活動の様子と現在の運動及びスポーツ実施状況との関係について、表7は、運動部活動の様子と今後の継続意志との関係について見たものである。表6では、現在何らかの形で運動及びスポーツ活動を実施しているものとほとんど行っていないものとに分類し、部活動の様子の違いを検討し、有意な差が認められたものだけを抜粋して掲載している。

表4 高等学校運動部所属の有無と現在の満足度と今後の継続意思

	所属		非所属		全体合計		t 値
	Mean	N	Mean	N	Mean	N	
現在の活動満足度	3.51	235	3.18	99	3.41	334	2.36 *
今後の継続意思	4.44	329	3.88	258	4.19	587	7.16 ***

p<.001=*** p<.01=*

注) それぞれ5段階尺度を5点満点で得点化。得点が高いほど意識が強い。

また、継続意志についても満足度同様に平均点は4.44と高い値を示しているが、この平均点を基準として高継続群と低継続群とに分類し、活動の様子それぞれの平均点での比較を行った(表6)。その結果、8項目で有意な差が認められた。今後の運動及びスポーツの継続意志に影響を与えていると思われるのは、「レギュラー選手」「考えを話せる雰囲気」「仲間」「積極的な運営への関与」が1%水準で有意な差が認められ、「自分の役割」「積極的な参加」が0.5%水準で有意な差が認められた。また、「種目への興味の深まり」「その種目の技能習得」が0.1%水準で有意な差が認められた。これらは、運動部活動で満足するために必要と思われる項目と異なり、自分の居場所が運動及びスポーツ活動の中に見いだすことができたものについて継続意志が高くなっていると見ることができよう。

5. 運動部活動の構造と満足度・継続意志との関係

活動の様子についての構造をより深く把握するために、本調査で用いた部活動の様子に関する28項目について因子分析を行った結果、表8のように6因子が抽出された。第1因子に高い負荷量を示した項目は、活動目標の明確さと理解、練習内容の理解と充実、指導者及び施設に関することであり、運動部活動の基本的な留意事項であり、『基本事項』と解釈した。第2因子では、運営及び活動へのモチベーションの高さ、役割による積極的な関わり、仲間や雰囲気に関することである。これらは運動部の居心地が良く、生徒たちの居場所として機能していることが伺える。つまり、クラスや学年を超えた生徒の心と深く関連する集団に関する事柄であり、『集団機能』と解釈した。第3因子では時間と日数に関する項目であり、

表5 運動部活動経験の総合満足度と活動の様子の比較

		高満足群		低満足群		t 値	
		Mean	N	Mean	N		
1)	記録や戦績を重視した部であった	3.30	185	2.76	142	3.60	***
2)	楽しさを重視した部であった	3.52	185	3.24	142	2.01	*
3)	顧問(指導者)が練習日程・内容を決めていた	3.22	183	2.96	140	1.55	
4)	部員同士で相談して練習日程・内容を決めていた	3.25	185	3.08	142	1.10	
5)	活動内容が充実していた	4.16	184	3.24	142	7.38	***
6)	活動目標が明確であった	4.07	185	3.13	142	7.03	***
7)	活動目標を部員全員が理解していた	3.83	185	2.94	142	6.23	***
8)	練習内容を部員全員が理解していた	3.88	185	3.19	142	5.16	***
9)	自分はレギュラー選手であった	4.10	181	3.49	140	3.80	***
10)	レギュラーと補欠では扱いが異なっていた	2.17	181	2.28	141	-0.75	
11)	上下関係(先輩・後輩)が厳しかった	2.05	184	2.24	141	-1.32	
12)	理由を問わず練習を休むことはできなかった	2.86	185	2.70	139	0.97	
13)	レギュラー選手は年功序列で決まっていた	1.72	183	1.85	140	-1.14	
14)	自分の考えを話せる雰囲気があった	4.19	185	3.35	142	6.55	***
15)	今でも交際している良い仲間ができた	4.65	185	3.71	141	6.99	***
16)	部活動の運営に積極的に取り組んだ	4.25	185	3.24	142	7.26	***
17)	部員としての自分の役割が明確であった	4.24	185	3.22	142	7.75	***
18)	部活動の練習に積極的に取り組んだ	4.54	184	3.41	140	9.03	***
19)	スポーツ施設・用具が充実していた	3.31	185	2.79	140	3.56	***
20)	顧問(指導者)の先生が良かった	3.60	184	2.70	139	5.67	***
21)	一回の活動時間が長かった	3.15	185	2.73	141	2.77	**
22)	一回の活動時間が短かった	2.39	184	2.59	140	-1.33	
23)	活動日数が多かった	3.69	185	3.01	142	4.38	***
24)	活動日数が少なかった	1.93	185	2.47	140	-3.73	***
25)	その種目への興味が深まった	4.67	184	3.55	140	9.31	***
26)	達成感を味わった	4.59	185	3.27	141	10.94	***
27)	勝つ喜び・何かができるという喜びを味わった	4.61	185	3.46	142	9.15	***
28)	その種目が上手になった(技術が向上した)	4.48	185	3.61	142	7.39	***

p<.001=*** p<.005=** p<.01=*

注) それぞれ5段階尺度を5点満点で得点化。得点が高いほど思いが強い。

表6 運動部活動の様子と現在の運動及びスポーツ実施状況との比較

		運動あり		運動なし		t 値	
		Mean	N	Mean	N		
9)	自分はレギュラー選手であった	3.94	235	3.53	90	2.18	*
16)	部活動の運営に積極的に取り組んだ	3.91	239	3.57	93	2.18	*
24)	活動日数が少なかった	2.23	238	1.92	92	2.15	*
26)	達成感を味わった	4.11	238	3.75	93	2.38	*
27)	勝つ喜び・何かができるという喜びを味わった	4.20	239	3.85	93	2.41	*

p<.01=*

注) それぞれ5段階尺度を5点満点で得点化。得点が高いほど思いが強い。

『活動量』と解釈した。第4因子では、部活動の方針、練習日程や内容の決定方法及び生徒の扱われ方に関する項目であり、『決定事項』と解釈した。第5因子では、技術の習得、喜びの体得及び達成感に関する項目であり、『スポーツの本質』と解釈した。第6因子では、年功序列や上下関係の厳しさといった、社会を描写する側面の項目であり、『縦社会』と解釈することとした。

この部活動を構成する6因子が運動部活動の満足度と今後の継続意志にどの程度影響を及ぼすかについて検討した。表9は、満足度を従属変数とし、因子分析によって得られたケース別因子得点を独立変数として重回帰分析を行った結果である。分析の結果、第4因子(決定事項)を除く5因子が満足度に有意な影響を及ぼすことが示された。各因子の中での規定力を見ると、集団機能>

スポーツの本質>基本事項>縦社会>活動量という順になった。表10は、継続意志を従属変数とし満足度と同様に分析を行った結果である。継続意志については、2因子が今後の継続意志に有意な影響を及ぼすことが示された。2因子の規定力は、スポーツの本質>集団機能である。この両者の結果を受けて、満足度に影響を及ぼす第一の因子は集団機能であったが、今後の継続意志に第一に影響を及ぼす因子はスポーツの本質であった。つまり、高等学校運動部での活動は、集団機能に支えられているが、その集団はあくまでも高等学校レベルのものであり、集団機能の残像が大学生の運動やスポーツに向かわせる以上に、高等学校運動部では、第二位であったスポーツの本質が大学生の運動及びスポーツに向かわせる態度を育む上で重要となることが示唆されたといえる。

表7 運動部活動の様子と今後の継続意志との比較

	高継続群		低継続群		t 値
	Mean	N	Mean	N	
1) 記録や戦績を重視した部であった	3.06	217	3.17	111	-0.67
2) 楽しさを重視した部であった	3.44	217	3.26	111	1.21
3) 顧問(指導者)が練習日程・内容を決めていた	3.09	213	3.18	111	-0.50
4) 部員同士で相談して練習日程・内容を決めていた	3.22	217	3.08	111	0.81
5) 活動内容が充実していた	3.78	217	3.70	110	0.57
6) 活動目標が明確であった	3.64	217	3.67	111	-0.18
7) 活動目標を部員全員が理解していた	3.44	217	3.42	111	0.12
8) 練習内容を部員全員が理解していた	3.54	217	3.62	111	-0.57
9) 自分はレギュラー選手であった	3.97	213	3.55	108	2.48 *
10) レギュラーと補欠では扱いが異なっていた	2.17	214	2.37	109	-1.22
11) 上下関係(先輩・後輩)が厳しかった	2.13	216	2.19	110	-0.44
12) 理由を問わず練習を休むことはできなかった	2.76	216	2.89	109	-0.72
13) レギュラー選手は年功序列で決まっていた	1.77	215	1.77	109	-0.03
14) 自分の考えを話せる雰囲気があった	3.93	217	3.65	111	2.06 *
15) 今でも交際している良い仲間ができた	4.37	216	4.05	111	2.29 *
16) 部活動の運営に積極的に取り組んだ	3.94	217	3.56	111	2.54 *
17) 部員としての自分の役割が明確であった	3.94	217	3.53	111	2.83 **
18) 部活動の練習に積極的に取り組んだ	4.17	214	3.81	111	2.67 **
19) スポーツ施設・用具が充実していた	3.19	216	2.95	110	1.52
20) 顧問(指導者)の先生が良かった	3.30	214	3.03	110	1.60
21) 一回の活動時間が長かった	2.95	216	3.02	111	-0.41
22) 一回の活動時間が短かった	2.51	216	2.39	109	0.80
23) 活動日数が多かった	3.43	217	3.41	111	0.08
24) 活動日数が少なかった	2.18	217	2.03	109	1.03
25) その種目への興味が深まった	4.35	217	3.88	108	3.61 ***
26) 達成感を味わった	4.04	217	3.94	110	0.74
27) 勝つ喜び・何かができるという喜びを味わった	4.19	217	3.95	111	1.68
28) その種目が上手になった(技術が向上した)	4.27	217	3.84	111	3.40 ***

p<.001=*** p<.005=** p<.01=*

注) それぞれ5段階尺度を5点満点で得点化。得点が高いほど思いが強い。

表8 運動部活動の様子項目の因子分析

	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5	F 6
7 活動目標を部員全員が理解していた	0.78281					
8 練習内容を部員全員が理解していた	0.76072					
6 活動目標が明確であった	0.72730					
5 活動内容が充実していた	0.70308					
22 顧問(指導者)の先生が良かった	0.53951					
21 スポーツ施設・用具が充実していた	0.48124					
16 部活動の運営に積極的に取り組んだ		0.80362				
15 今でも交際している良い仲間ができた		0.73177				
17 部員としての自分の役割が明確であった		0.72970				
20 部活動の練習に積極的に取り組んだ		0.59861				
14 自分の考えを話せる雰囲気があった		0.47196				
24 一回の活動時間が短かった			-0.84697			
23 一回の活動時間が長かった			0.77102			
26 活動日数が少なかった			-0.74079			
25 活動日数が多かった			0.69400			
4 部員同士で相談して練習日程・内容を決めていた				-0.78046		
3 顧問(指導者)が練習日程・内容を決めていた				0.76700		
2 楽しさを重視した部であった				-0.55091		
10 レギュラーと補欠では扱いが異なっていた				0.52754		
1 記録や戦績を重視した部であった	0.43637			0.44065		
12 理由を問わず練習を休むことはできなかった				0.42073		0.40537
30 その種目が上手になった(技術が向上した)					0.74811	
29 勝つ喜び・何かができるという喜びを味わった					0.73508	
28 達成感を味わった					0.66756	
27 その種目への興味が深まった		0.45534			0.48405	
13 レギュラー選手は年功序列で決まっていた						0.75935
11 上下関係(先輩・後輩)が厳しかった						0.58682
固有値	7.63	3.69	1.74	1.31	1.28	1.06
累積寄与率(%)	27.24	40.42	46.63	51.32	55.89	59.67

表9 運動部の満足度に影響を及ぼす活動

因子	標準化		順位
	回帰係数 β	t 値	
F1 基本事項	0.278	6.58 ***	3
F2 集団機能	0.447	10.58 ***	1
F3 活動量	0.086	2.03 *	5
F4 決定事項	-0.053	-1.26 n.s.	(6)
F5 スポーツの本質	0.427	10.11 ***	2
F6 縦社会	-0.147	-3.49 ***	4
決定係数 (R^2)		0.486	
F 値		45.46 ***	

表10 今後の継続意志に影響を及ぼす活動

因子	標準化		順位
	回帰係数 β	t 値	
F1 基本事項	-0.056	-0.97 n.s.	(5)
F2 集団機能	0.124	2.16 *	2
F3 活動量	-0.087	-1.52 n.s.	(3)
F4 決定事項	-0.057	-1.00 n.s.	(4)
F5 スポーツの本質	0.155	2.70 **	1
F6 縦社会	0.031	0.53 n.s.	(6)
決定係数 (R^2)		0.053	
F 値		2.70 *	

IV. 結 語

本研究では、高等学校時代における運動部所属の有無及び運動部活動経験が大学生の運動生活及びスポーツ生活にどのように影響を与えているのか検討してきたが、高等学校運動部の所属の有無が現在の運動及びスポーツ活動の状況、つまり運動及びスポーツ生活に影響を与えているといえる。特に運動部活動に所属した経験のあるものは継続的に運動を行う傾向があり、今後の運動及びスポーツ実施への志向も強く、生涯にわたるスポーツに親しむ態度を育む機会となっていることが再確認された。今後の運動及びスポーツ生活をより促進するための第一歩は、運動部活動における満足度を高め、維持する運営である。満足度を高める要因として、活動目標や内容の明確化とその理解、指導者、スポーツ施設といった部活動を行う基本的な事柄の整備以上に、自分の居場所としての部活動といった心理的側面に関わる配慮が必要になる。そして、スポーツの本質である楽しさや喜び及び達成感を体得できる運営を行うことが求められる。第三に「指導者」や「施設・用具」等の条件を併せて整備することが示唆されたといえるが、特に外部指導者については、昭和32年の文部省初等中等局長による「中学校・高等学校における運動部の指導について」という通達でも触れられており、45年経過した現在、改めてその養成を含めた方策について検討されていることは皮肉なことといえよう。

また、今後も継続的に運動及びスポーツ活動に関わる意志に関連するものに、部活動の満足に最も影響力を及ぼした集団機能以上に、技術の向上、勝つ喜びやできる喜びそして達成感といったスポーツ本来の醍醐味を如何に運動部活動の中で保証していくかが課題となってくる。もちろん、部活動で積極的な関わり、経験した雰囲気や

役割(居場所)も今後の継続意志に影響を与えている。さらに、現在の運動実施状況を含め全体的に判断するならば、高等学校運動部の良好な経験は、大学での速やかな運動及びスポーツ活動への接近を促しているといえる。しかしながら、本研究のもう一つの課題であった高等学校運動部の所属経験が、スポーツ活動への自立的参加態度を育成し、経験のないものは従属的な参加態度をとるのではないかという仮定は、大学生の運動及びスポーツ活動の状況において明確に確認することができず、その測定方法や理論的構成は今後の課題といわざるを得ない。

近年、関係各方面で運動部活動の見直しが叫ばれているが、スポーツ経営体である中体連や高体連等の学校体育団体がより健全な活動を推進する必要があると、各スポーツ経営体の連携等により過度の勝利至上主義による弊害の是正(練習の在り方、大会や試合の在り方財政的負担)等を検討する必要があることは言うまでもない。また、学校教育の動向を踏まえた合理的な組織運営の工夫や組織の改善充実に努めることも望まれている。その一方で、顧問の高齢化や実技指導力の不足を補うために、地域の指導者を活用することも課題となっているが、地域の指導者に対する学校関係者の理解が不十分であること、その指導者を管理・派遣するシステムが整備されていないこと、指導者が十分に協力できる条件が整備されていないこと等、その体制ができていないとも言えないのも現状である。逆に、地域の指導者が技術指導に終始し、運動部活動の意義や運営の在り方に対する理解が十分でない場合もある。しかしながら、今活動している生徒たちの部活動を保証する観点から、部活動の目標を生徒のニーズを踏まえながら検討し、目標を運動部員全員に浸透する努力と練習内容の理解が必要である。高等学校運動部活動の充実はもちろん卒業後の運動及びスポーツへの接近行動、運動及びスポーツの生活化を視野に入れた改善が円滑に進むよう期待している一方で、本研究では大学生に対するスポーツ環境の整備には触れていないが、本調査において、運動部所属経験がないものが運動に対して好意的な意識(今後運動及びスポーツを始めたいという意識)を持ったものも少なくないこともわかった。生涯にわたって運動及びスポーツに親しむ態度を育む教育的機会は大学にも残されており、これらの学生が実質的な運動及びスポーツとの関係を構築する最終段階としての責任を担っている。

文 献

- 1) 21世紀を展望した我が国の教育の在り方について (第一次答申) 中央教育審議会 1996.7
- 2) 生涯にわたる心身の健康の保持増進のための今後の健康に関する教育及びスポーツの振興について (答申) 保健体育審議会 1997.9
- 3) 幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校, 盲学校, 聾学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について (答申) 教育課程審議会 1998.7.29.
- 4) 運動部活動の在り方に関する調査研究報告書 中学生・高校生のスポーツ活動に関する調査研究協力者会議 1997.12.

- 5) 学校運動部活動の活性化と今後の在り方について－
建議－ 1999.3 神奈川県スポーツ振興審議会
- 6) 中・高等学校生徒の運動部活動の在り方について（提
言）大阪府スポーツ振興審議会1997.3
- 7) 意識改革が求められる部活動 船橋市スポーツ活動
検討委員会 2000.3
- 8) 宇土正彦編著 [最新] 学校体育経営ハンドブック
大修館書店 p 380 1994
- 9) 宇土正彦他編著 体育経営管理学講義 大修館書店
p 79-80 1989
- 10) 内海和夫著 部活動改革 不昧堂出版 1998
- 11) スポーツ振興基本計画 文部科学省 2000.9